

■ なおもドルの相対優位は続く…

昨日(4/24)から行われている日銀金融政策決定会合では、今後の追加緩和策実施の可能性を匂わすかどうかという点に加えて、所謂「展望レポート」の内容が注目される。

今回の展望レポートにおいては、国内総生産(GDP)予想に下方修正を施すことが見込まれており、一つには(下方)修正の程度に市場の関心が向かうと見られる。その内容が6月の日銀短観にも影響することは間違いなく、少し先にはなる(短観の公表は7/1)ものの、10月の消費税率再引き上げの行方に関わる思惑とも絡んで市場では材料視されやすい。

追加緩和策の実施については「次回以降」の決定になると見る向きが多いようだが、個人的には「ETF(とくにTOPIX連動タイプ)」の購入枠拡大ぐらいはあってもいいと見ている。その是非は問われるところかもしれないが、とにかく「黒田流」はわかりやすさがモットーであり、さほど金融・経済に詳しくない人々にも一発でアピールできる内容であることが求められる。いずれにしても、日銀の政策スタンスは想定以上にハト派寄りであると考えられ、その点ではドル/円の強気派にとってフレンドリーと言える。

今週は、本日(4/25)以降に重要イベントが目白押しであり、其々の行方によっては一時的にも相場が揺れ動く可能性は大いにあると見ておきたい。

まずは、金正恩朝鮮労働党委員長とプーチン露大統領との首脳会談が大いに気になる所であり、とくにトランプ米大統領がどのように反応するかが注目される。北朝鮮の核廃絶の方向性について、これまでロシアは蚊帳の外に置かれていたようにも思われたが、結局は一番大事なところでやはり出張ってきた。米・中・露の関係性に一層の歪が生じるようであれば、地政学的リスクの高まりからリスク回避の円買いが一時的にも強まる可能性はあろう。

また、今週は週末にかけて麻生財務相とムニューシン米財務長官による財務相会談、茂木経済財政相とライトハイザー米通商代表部(USTR)代表による第2回日米物品貿易協定(TAG)交渉、日米首脳会談と極めて重要な米・日間の政治イベントが続く。もっとも、日米貿易合意に「為替条項」が盛り込まれる可能性とか、米財務省が今回の日程に合わせて為替政策報告書を発表する可能性などについては既に織り込み済みであると考えられ、もし一時的にも円高方向になびく場面があれば、そこは円売りを仕掛けるチャンスになり得ると個人的には考える。

今のところ、ドル/円は日足ベースで21日線、200日線などに下値をサポートされているう



よっては材料一つで「トライアングル上放れ」となる可能性は十分にある。

一方、足下ではユーロ/ドルが一段と下値余地を拓ける展開となっており、ここで1.1200ドル処をクリアに下抜けると、そこから1.1000ドル割れに一気に雪崩れ込む可能性もないと見られる。なおも、ドルの相対優位は続きそうだ。(04月25日 11:00)